

「異界」としての吃音学院 あるいは「幻想」としての吃音

——小島信夫「吃音学院」をめぐって

正田雅昭

1 二重に「疎外」された「異界」

「吃音学院」（昭和二十八年八月「文学界」）は、吃音学院へ「運ばれる」ことにより、「もう紛れもない吃音者になった」と自覚させられることから始まる物語である。最終的に学院の治療法を内面化し指導者的な立場に立つことになる結末は、ある意味「異界」に行ったまま帰って来なかった物語であるとも言える。

茶色のスクーターが走ってくると、青いリボンを右胸につけて水道橋駅前に立っている僕の前に止った。その青いリボンが、K吃音学院の入学生のものだったのだ。案内書には、重症患者には運搬のサービスもするからこのリボンをつけているようにと書いてあった。吃音者が物を云わずに学校まで運ばれるという仕組みなのだ。(25)

「運ばれる」あるいは「運搬者」という語を用いる語り手の意識は、もはや吃音者ではないという語りの現在から、過去の自身の姿をみるという二重の相対化を前提としている。つまり語り手自身が、物語世界の外部の位置から語っているのだが、その語り手（衣川）を俯瞰的位置から見れば、本来の意味で「治っている」のかは疑問が残る。

学院生たちは、吃りであることにより、一時的にせよ、「常界」から排除されて来た存在である。ゆえに、「治療」し常界に戻ることが目標（卒業）となるわけだが、この学院の関係者らは、自称、元「吃り」である。

つまりは、内部の他者として「異界」に留まり続けることを自ら選んだ存在なのである。

大川太助は、自分自身も「吃り」であったと述べる。

吃りは恥ずかしいですからね。僕も元をただせば吃りです。もともと僕は吃りの生徒ばかりの中で育ったのでうつつたんですが。だから僕は被害者なんだ。(29)

吃音が「まね」により「うつる」という偏見は、未だに否定されることのないまま今日に至る俗説なのであるが、この物語において「まね」という行為は非常に重要である。

一般的に、吃音は、話すことをめぐる「病」と捉えられている。近代社会において書くことは、あくまでも教育システムを通して「学ぶ」ことよって初めて習得可能な行為であり、一方で話す能力は「まねる」ことにより自然習得されるものとされる。だが、「学ぶ」ことの語源に「まねる」ことがあるように、両者の間には本来絶対的区分は存在しない。にもかかわらず、吃音が治療すべき身体の「異常」つまりは「病氣」であると考えられるのは、「書く／話す」の間に「近代教育」という視線が介入することにより、横の分別構造が「健康／病氣」といった縦の差別構造に転位された結果なのである。

もちろん、ディスレクシア（読字障害）やディスグラフィア（書字表出障害）という概念自体が比較的新しい「症状」として概念化されたも

なので、吃音をめぐる文字言語と音声言語の相関性には、不明な部分も多い。だが、少なくとも作者自身の体験をもとにしているこの物語^①では、音声言語／文字言語という対立が重要なキーワードとなっている。

音声中心主義的な概念を吉本隆明的な「疎外」から基底される言語発声論で考えれば、言語は「疎外」による「自己表出」の高まりによって発せられる「指示表出」的な側面が形式化を促す。その後、吉本は『共同幻想論^②』において人間（言語）社会の本質を「幻想」とみなす。

『共同幻想論』で用いられる分析装置は主として「自己幻想」「対幻想」「共同幻想」の三つである。個人と個人の関係を示す「自己幻想」は芸術など美の領域と深く関わる。一方で、家族、友人、恋人など個人と他者との私的な関係性を「対幻想」と呼び、これは特に性の領域と関係が深い。そして人々を包み込む公的な関係性を「共同幻想」と定義し、主に国家や経済システムなどと重なる。

吉本の「幻想」という発想の根源は、生物そのものを自然からの「疎外」と考えることである。個人という意識（近代的自我）そのものが、自然基底からの「疎外」であり、それが対他意識として自我を形成する。対他意識は自己そのものではないが、そこから生じる「幻想」こそが「自己」の本質である。種の保存としての自然的な性から「疎外」されたものが「対幻想」であり、社会的国家という自然基底から「疎外」された、上部構造（資本経済やそれに伴う国家制度）が「共同幻想」である。

吉本の「幻想」という概念には定義不明瞭な点が多くあるが、あえて「吃音学院」というテキストを音声中心主義的な言語社会からの「疎外」をめぐる物語であると考えてみることは、物語中の一見無関係に見える個々のエピソードを重層的に結びつけてゆこうとする我々に重要な示唆を与えてくれる。細かくみてゆこう。

2 「共同幻想」としての吃音

岡本真紀子の指摘^③にあるように、この「K吃音学院」とは、地理的な条件からは栗石社のことであると考えられる。だが、物語は、この学校のモデルを明言しないまま、かなり詳細な形で暗示している。もし、そこに、前述の小島信夫の作家言説が加わると、大阪の桃山の学校における作家の実体験という読み込みの方が強く働くことになるのだが、同時代読者にとって、この架空の学院の表象には、常に栗石社及びその創始者である伊沢修二の像が重なってくる。

近代日本の教育システムの黎明期において伊沢が果たした役割は非常に大きい。その仕事は多岐にわたるが、ここで注目したいのは、伊沢が国定教科書の言文一致に大きく関わっていた点である。周知の通り、伊沢の教育のルーツには国語教育に加え、音楽教育があるのだが、伊沢の中ではこの両者は繋がっていた。伊沢の国語教育とは、文字教育よりも、第一義的には音声教育である。言うまでもなく、国民国家教育の根幹である国語教育とは、日本語（標準語）教育であるわけだが、以下の橋本雄太及び奥中庚人の指摘は興味深い。

伊沢は国語教育になぜ韻律的な文章や口語体を採用しようとしたのだろうか。奥中は伊沢が一八六七（慶応三）年に信州高速から東京へ出て来たとき、日常会話に戸惑ったと推測している。つまり、伊沢が過ごした明治時代の日本の話し言葉の状況が背景としてあると考えられる。明治日本は廃藩置県や市民平等によって自由な移動が可能となり、国民の話し言葉をどうするかを重要な課題としていた。そこで伊沢は方言を矯正しなければならないと考えたと推定される。伊沢が標準語教育に拘ったのは、口語によるコミュニケーションという非常に実利的な理由であったと同時に、それは方言の「矯正」を意味

していたのである。こうした伊沢の体験から、コミュニケーションの障害となる吃りが「矯正」の対象として意識されたことは想像に難くない。伊沢が音楽教育と国語教育を重ねて考えるようになった直接的な経験は、自身の留学体験であった。

困ったことが二つあった。(中略)随分ひねくれた英語でやつて来たのであるから、中々向ふ人に解る様に話すことが出来ぬ、これには非常に難儀したのであったが、後にベル氏に就いて、視話法の教を受け発音を矯正して以来、卒業当時は普通の談話に差支へぬようになり、然かも其の於ては、視話を応用して仕事をしてをるやうになった。

国家レベルの事業に対して多くの西洋の知を移入することが急務であったこの時期の留学生にとって英語力とは知の根幹となるものであった。もちろん伊沢もそれは例外ではない。その能力を飛躍的に向上させたのが、音声矯正という教育法であった。

伊沢に詩話法を伝授したのは、電話の発明者で有名なG・ベルであるが、そもそも詩話法はその父親であるアレキサンダー・メルヴィル・ベルによって開発されたものである。もともと聴覚障害者の会話教育に使用されるものであったため、言語の基本単位が視覚的情報によって表現されることに特徴があり、後に、それは言語を越えて音を記述する発想(音素)の源になっていった。

以上の点を考えると、伊沢がこの方法に関心を示したのも、音の矯正が言語習得にとって最も重要であるという考えが根底にあったのだと思われる。また、方言の訛りに悩んだ伊沢にとって言語は、音声を理想的な状態に「矯正」することから始まるものであり、それは日本語でも英語でも同様であった。さらに、その発想は、音楽教育が理想的な状態を目指してリズムや音程を「矯正」することにあることも通底している。

伊沢が日本初の吃音矯正所である楽石社を設立したのは一九〇三(明治三六)年のことである。「楽石」とは、伊沢の号であり、同じ小石川在住であった川柳作者の礪川によるものである。さきの橋本の指摘によると、楽石社は単なる吃音矯正所というわけでもなかった様で、様々な教育実践がおこなわれていたようだ。

楽石社には(1)視話法を伝習す、(2)正しき日本語を伝習す、(3)正しき英語音を伝習す、(4)正しき清国語音を伝習す、(5)正しき台湾語音を伝習す、(6)方言の訛を矯正す、(7)吃音を矯正す、(8)唾子にものを言はしむ、という7つの科が設けられていた。吃音矯正が中心ではなく、音声言語を主とした機関であったのである。

ここで注目すべきなのは、詩話法を媒介として「正しき日本語」という目標が立てられ、吃音の「矯正」と方言の「矯正」が掲げられていることであろう。「日本語」を通じて幻想の「日本人」を生み出そうとすることは、伊沢に限らず国民国家成立期の教育の典型的な姿であるが、伊沢の音楽と言葉の教育観に通底する音声中心主義的言語観の問題は、その両者を「美しさ」という観点で容易に結びつけてしまうことだ。

「吃音学院」という物語は、こうした伊沢に代表される近代の言語教育観を重ねて読むべきテキストである。だが、であるならば、なぜはつきりと同定されない黙説的な描かれ方になっているのか。結論じみたことを先に述べれば、このテキストが吃音といった特定の「病理」をめぐる諸問題を提示しているだけではなく、裏にそれを遙かに超えた射程を有しているからだ。それは何か。先に議論した吉本の提示する「幻想」というキーワードを補助線とすることで、このテキストの社会言語学的射程を考えて見たい。

3 「自己幻想」としての吃音

僕は大人に自尊心を傷つけられた。十八歳になるまで面と向ってこういう態度に出られたことはなかったのだ。中学一年の時だった。社会科学の授業の時、キリストはどこで生れたか、と聞かれたことがあった。

(26)

冒頭部で矯正学校に「運ばれる」際に、想い出す中学時代の記憶。ここのキーワードは「自尊心」だと思われる。重傷者扱いの証となる青いリボン、患者扱いされながらモノの様に運ばれる身体、学生時代に繰り返されてきた「疎外」の体験が、結果的に「紛れもない吃音者になったのだ」というの「自覚」を否応無しに促す。

だからそいつ（読書の時に現れる伏兵のような幻影——論者註）のそばへ近づくと、二、三行先きから僕の読む速度は次第次第にはやくなり、はやくなり、はやくなり、遂にかんじんの文字の上を通りすぎる時には、自分にもいつ通りすぎたか分らぬほどの超スピードを発揮し、一秒の何十分の一かで身を投げ出すように次の単語にうつっている。通りすぎられたら、僕は自尊心をとり戻す。(27)

吃音者にとって、言葉を発するコトは常に恐怖である。言いにくい（と予測される）言葉に対し、音読の速度をあげることによって対処しようとするが、その結果としての言葉の有り様を「非音楽的リズム」と唾棄する。そして、この「恐怖」と常に裏表の関係にあるのは「安心」よりもむしろ「自尊心」である。

また、文字が先にありそれを目で確認してから読むのは、この例が音読であるからだ。後に、衣川にとってはいかなる場合でも、音声を発することは、常にその前に音声に対応する文字（とそれに伴う幻影）が想定されていることが分かる。

いいか、おびえる必要はない。おれを石ころだと思いなさい。いや、どの人げんも皆石ころだと思っただよ。きみだけが此の世の中に生きていて……たとえばだ。きみが吃りでも、皆がきみの従者なら、むしろきみのまねをすることになる。きみが法律で吃らぬ奴は片端から殺してしまおうと云って見なさい……(30)

衣川の松波学院長の印象は「鼻だけ突起した壮士風の男」であった。松波の比喩話に深く同意した衣川は、これまでの自らの羞恥を「まわりの皆のためなのだ」と思い至る。そして、その比喩から連想された物語「鼻高王子」を文字として想起して、そのまま院長の目の前で発声してしまふ。結果、松波の自尊心を傷つけてしまった上に吃音を誘発してしまつたことは、この学校の根本的なダブルバインドを象徴している。衣川の行動は、教員の教えをそのまま、教員に実行したものであるからだ。

「先生も吃りですか」

「あたり前ですよ。ここは誰も彼も吃りですよ。教師もそうですし、小使も小使の息子もそうです」(31)

「吃りの生徒ばかりの中で育つたのでうつつた」と「被害者」性を強調する大川は、ここで言われる「小使の息子」に相当するのだろう。吃音を矯正する側は、吃音を「うつされ」ることにより他者から「疎外」されたが、その吃音を再び自らの外部へ追い出すことに成功した者たちだ。だが、そんな成功者も、吃音者に関われば、自らの吃音を再び誘発してしまふ危険が伴う。周囲を「まねる」ことが吃音の原因となり、それを矯正することを吃音克服者から「学ぶ」。このことは、元吃音者による吃音矯正の可能性を示すと同時に、「吃音学院」自体が「まねる」||「まねる」をめぐるダブルバインドの場である^{トポス}ことを示している。

現在、吃音が「伝染る」あるいは「遺伝る」というのは医学的には否定されているが、根強く残っている俗説である。だが、言語習得の本質

が「まねる（学ぶ）」であることを考え合わせても、この物語で多くの反復（まねる）が生じていることは、偶然ではない。

「いつから吃りになったのです」

と彼はベンをとりあげた。幼時の頃からだと僕は答えてやった。僕はいつどこで此の病気を拾ったかおぼえていない。 (31)

衣川は、吃音における物語的（因果的）な必然性など信じてはいない。だが「拾った」という言葉の選択は、衣川が無意識レベルでは、吃音を「うつる」ものとして捉えていることを示しているとも言える。衣川は、あえて関係ありそうな話をしてやることによって、相手を喜ばせようとしているのだ。

だが、母をめぐる自分の裡の記憶は、敢えて言わないでいる。衣川が意識的に否定しているのは、自己幻想についての物語論的な因果性でありながら、隠しているトラウマも同種の物語なのである。これは、無意識レベルでのトラウマへの「抵抗」なのだろうか。

院長が言う「優等生」とは、対処法を自分で分かっている衣川の言動を指すのであろうか。しかし、衣川が表層的には隠しながらも実は語ってしまっていることは、吃音者としての「自己」とは、他者との間に生じる「自己幻想」の結果であるということなのだ。

僕は何となくこの先生に使うて貰えるようになっていたいと思った。吃りのことを日夜話し吃りの中で暮しているとすれば、僕は吃りのことを忘れるには却って好都合かも知れない。 (34)

衣川にとつて院長に「使って貰えるようになる」ことは、吃音によって疎外される側から、疎外が生まれ得ない吃音者だけの場へ移動することだ。たしかに、吃音が対人的な「自己幻想」から生じるものであるならば、吃音者しかいない空間に自閉すればよいのだ。しかし、それすら、院長の考え方の反復（まね）なのである。吉本によれば、本来は自然の

一部でしかなかったものに発生した「自己意識」は、最初から「幻想」でしかないものだった。より一層構築主義的な考え方が徹底された現代思想の文脈においても「自我」は既存の言語の反復でしか実現されない何かだ。言葉が本質的に反復でしかないならば、そこから生じる「自己意識」もまた反復以外のなものでもない。

4 「対幻想」としての吃音

僕は女が向うから歩いてくるだけでどうしたものかと赤面し恐怖したものだ。広い道なら僕は彼女の正反対の側の溝板の上でも踏んで、視線を外しつつ歩くであろう。 (35)

衣川の対人恐怖の中で最たるものは女性であった。物語に登場する主な女性は、小学生の桃木の母親と柿本であるが、両者への印象は随分異なる。執拗に吃音で話しかけてくる諸留に対して、全く発話しようとしない柿本への初印象は、「どうしてもあの娘さんを治してやらねばならぬ」である。それも、通常なら「差恥心と悔恨の情」が湧いてくるはずの女性が、何故か治療すべき対象として認識されているのだ。

一方小学生桃木峯之の母親も、諸留と同様に、自分の主張を声によって直接的に押しつけてくる。なぜ、諸留らとならば対等に喧嘩出来る衣川が、この母親の理不尽な要求は受け入れざるを得ないのか。

吃音ではない上に厚かましい性格の母親は、淀みなく自分の言いたいことを伝える。吃音者にとつてそれは、圧倒的な力となって襲いかかる。だが、吃音者同士ならば、相手の吃音を引き出すことによつて対等な立場になることが出来る。彼らは、長い「屈辱」の生活の中でそれを知っているのだ。普通に話せること、それ自体が「武器」なのだ。

また、吃音者たちは、誰かの言葉（遣い）を「まねる」ことが、話す

際の負担を軽くすることを知っている。諸留が院長の言い方の「受売」をしていることは、この物語が複製に満ちたものであることを象徴している。だが、同じ吃音者としての対等性を有しながらも、諸留が厄介なのは、彼の露骨なまでの性衝動の話題である。

諸留の性的な眼差しを単なる衝動的なものに見做し、己の性を道義的なものであると信じ込む衣川の態度は、柿本への態度を軸としての反転に過ぎないことを衣川自身は気がついていない。吃音を生み出す對他意識の根底に女性を見出す衣川にとって、同じ吃音者である女性の「発見」と思慕は、己の無意識のミソジニーの都合のよい反転でもある。この性的意識の抑圧的反動が、衣川の諸留への過剰反応となって現れているのだ。

諸留による桃木を使つての偽文という悪戯は、衣川にとって屈辱的なことであつたことは間違いないが、それとても、結果的に衣川と柿本との関係を進行させているのは、皮肉な展開である。衣川は、身の潔白を証明するために、柿本の部屋を訪れる。

柿本は頷き部屋の一隅を指さした。そこには蓮の花あり、大輪のダリアあり、季節外れの造花が無造作に放りだしてある。唾でもないのに唾のように物を云わずに彼女は毎日無言の話をしてくらしてきたのにちがいないが、こうしてくらせるものなら、物をぜんぜん云ぬぬのも美しくいいものだ、とも思うのだ。(60)

衣川には、柿本を包む物言わぬ「鶴」たちの「会話」が聞こえてくる様に思われる。それも「美しい」「声」としてである。柿本は「黙っている」「自由」のためにこの学校に來た。柿本は決して声を出さない。あくまでも、文字(筆談・手紙)で会話する。その意味で、柿本の言葉の音楽的な美しさとは逆説的なものだ。だが、吃音者の中で暮らしている吃音の「克服者」たちは、疎外されたまま、異界に住み続けている人々

である。その意味で、衣川の理想は、柿本が望んでいる姿と、本来ならば何も変わりはないはずなのである。

私は紙の鶴に言葉をあたえてあげた／神様とちがつて私の手ぎわがいいからだ／私はこの鶴を空に向つて一つずつとばす／私はいのるのだ。一つ一つの言葉が乱れとび／やがて話という音楽をかきならすのを／

「とぶ」とは自由に話すことと重なり、「紙」の鶴を作るのは、「神」よりもっと手際のいい「私」である。生み出された鶴たちは、自由に飛びながら「言葉」という「音楽」を生み出す。即興で生み出された言葉は、詩という枠組みを与えられたが故に、饒舌に言葉を「歌い」あげている。伊沢ならこれを「音楽」とは言わないだろう。しかし、衣川も指摘するように、この詩の評価はともかく、歌われていることは、共感に値する何かであつたのだ。

僕はすぐに柿本の部屋へあがつて行つた。うす暗い廊下を走つてゆくと、柿本の部屋の戸がとつぜん開いて諸留一人が僕の前を逃げるように通りすぎた。僕は予感的中した怒りで、諸留の襟をとつて引きまわし叩きつけた。(67)

柿本と諸留の間には、恐らく何もなかったのではない。諸留が部屋を飛び出したのは、衣川が部屋に到着する前である。確かに、諸留は性的な意味で柿本を狙っていたわけだが、合意の上の出来事であつたならば、それを成し遂げた諸留が逃げる様に部屋を出る理由はない。また、「何をおこしているの」という柿本の言葉は、衣川の気持ちを知っていることから考えても、恥ずべき罪の意識がそもそもないのだと思えない。

もちろん、この場面に確定した解釈を与えることは出来ない。だが、重要なのは、ここで諸留への断罪の手を緩めたのは、衣川自身の裡にも

存在する性的な欲望を認めざるを得なかったらだ。また、それは性的な競争に敗れたという屈辱感を、逐電した諸留と同類であるという自己反省に反転した結果に過ぎない。

だが、柿本との訣別＝諸留の逐電は、結果的には、諸留の有していた学院内のヘゲモニーを掌握するような位置、小使の大川と対等に渡り合えるような位置に衣川を押し上げた。それは、衣川が最初に院長に出会った時、「僕は何となくこの先生に使うて貰えるようになりたい」と思った、最初の願いの実現でもあった。

(どうしたらいいの。子供のくせに、やきもちや)

(僕のために話して下さい。声を出して話して下さい) (76)

衣川にとつて「対幻想」は吃音の二因であった。それだけに柿本との出逢いは、美しい言葉による、美しい声という幻想の超克、あるいは「声／文字」という階層性の解体など、様々な可能性があった。だが、吃音を裡に抱えたまま、吃音者たちの異界に留まり続けるという衣川の選択は、声にならない「美しさ」を否定することでは成り立たなかった。

「石ころ？ お前は何だ、その女は」

そう云われたのは柿本いね子で、彼女はとつさに僕の方を見た。

僕は腹の底まで見すえるように彼女を睨んだ。

「わ、た、く、し、も、ど、も、り、で、す」

彼女は僕にすがりつくようにして、僕の眼から自分の眼をはなさず、

はじめて歌うようであるが発声をした。

多くの解釈が集中するラストシーンである。柿本は、「常界」に向かっ

て己の存在証明の為に発話せざるを得なかった。それは、発話を矯正(強制)させる世界の圧力に屈服したことを意味する。だが、柿本の発声が「歌」であるのは、伊沢らの教育観にある「美」に規定された言葉つまりは衣川が矯正学校で学んだ「幻想」の言葉の中でしかない。たとえ、そ

れが「歌うようであ」ったとしても、単なる「発声」に過ぎない。布川に柿本の言葉が「歌」のように見えてくるといった未来は、永遠に閉ざされているのだ。

5 言語システムと経済システム

もうやがて着きます。ここへ来たならそのうち実地演習のため散歩をすることにしますから、よく道をおぼえておきなさい。ところであなたは資本主義をどう思いますか。若い人はどう思いますかね。え？ いやあなたは吃りでしたね。(29)

物語冒頭部で、大川に「資本主義」について尋ねられていることは、非常に印象的なのであるが、物語はしばらくの間このことには触れない。また、この「実地演習」というのも物語後半の重要なキーワードとなるが、それが分かることもしばらく後のことである。

学院についた大川は、すぐに「同僚」を連れに駅に戻っていく。大川に運ばれて来た同部屋の学生は、月賦販売会社の外交員である諸留と小学生の桃木であった。物語全体から俯瞰してみると、諸留と大川は実は反対の位置にあることに気がつく。月賦という形態は、大正期に西日本から東京の新興中産階級に普及していった販売形態である。戦争を挟みしばらくの間停滞していたが、朝鮮戦争以降の景気向上に伴って一気に一般化してゆくようになる。言うまでもなく、月賦による販売の促進には、自由経済社会の安定化が必要であり、それを實現する会社側にも巨大かつ安定した資本が必要である。

僕はそこまできて事の真相をつかんだ。諸留は遂に戦法もあらたに、学友に勧誘の手をさしのべてきたのである。(51)

多くの学院性にとって、諸留が「優秀な外交員」に見えたことは間違いない。本来、経済的安定性が期待出来ない相手に月賦でものを売りつ

けることは、上手い商売であるとは言えないが、最初から詐欺の成立後すぐに逐電するつもりであったのなら、相手に全ての料金完済を期待する必要もないわけだ。月賦会社の外交員と詐欺師。どちらも、巧みな話術を必要とする職業であるが故に、諸留の戦略に多くの人々が被害にあつたのかもしれない。だが、多くの場合詐欺師がつけ入るのは、経済的に他者より抜け駆けしてやろうする心理である。その意味で、両者の「仕事」は常に自由主義経済の中でこそ成り立つ。

一方で、そういった経済的競争を是認する社会を否定する立場であるはずの共産党員大川は、資本主義社会に取り込まれつつあつた経済成長下の共産党員の姿を逆説的に象徴している。大川は、諸留の儲け話に大いなる信頼を寄せる。

「あなたも入つたのですか」

と云うと彼は当が外れたといったふうに、

「そういうあなたの家だつて入るって契約したそうじゃないですか

ね。諸留がそう云つておりましたよ」

(57)

恐らく、大川にも経済的につけ込まれる隙があつたのだろう。だが、大川の衣川に対する態度は、まるで諸留や松川そのものである。

僕はよくそういう時に春画や猥本を見せられたおぼえがあるので、横を向いて知らん顔をしていると、彼はよけいにむきになって僕に見せようとし、

「若いくせに興味がないとはおかしいね」

(58)

という。余りに僕を誘うのでつい見ると、「球根栽培法」と表紙に刷つてある。

「イデオロギー」(の書籍)を媒介として人々をオルグしようとする大川の姿は、「性」(の書籍)を媒介として多くの人心につける諸留の態度と見事に符号している。事実、衣川も最初は「春画や猥本」を見せら

れるのだと思つている。また、食堂を舞台として、あるいは柿本の話題を媒介として、大川と諸留の態度は酷似している。ただ、性と金による諸留の影響力は、学院の内外に浸透してゆき、魚屋、桃木母子、桃木の親、そして大川をものみこんでゆく。「異界」も「常界」同様に、資本主義的原理に侵食された世界だからである。

言葉が「常界」において必須のコミュニケーションツールであるからこそ、そこから「疎外」されたものとして学院生たちはそこに居る。治療をめぐる「ヘゲモニー」争いは、そんな閉じられた学校空間という「異界」でしか意味をなさない。学院全体を「常界」と対置してみることが出来るのは、松波院長にしかない特権なのだ。戦後日本における共産党の運動がマイノリティであるが故に固い結束が要求され、資本主義社会の安定化の中であるが故に理論的支柱を必要とし、ヘゲモニー闘争が繰り返された様に、吃音学院という「異界」は、言語に支配された「常界」の反転した姿(内部の他者)である。

ソシユール以後の言語学は、言語を「記号」と考えることを徹底した。世界を「記号」の総体としてとらえようとする「記号学」的アプローチは、八〇年代のニューアカの基本的態度となつたことは周知の事実だが、そこではマルクスの価値論の積極的読み替えによつて、貨幣や紙幣の記号性が再三指摘されることになる。それ以前から、マルクスの「価値」論を吉本隆明が『言語美』で応用したように、経済汎用論と言語汎用論の結びつきは「記号」という面における両者の共通性を際立たせる。

そう考えて見ると「吃音学院」というテキストは、『言語美』よりもさらに十年早く、「経済」と「言語」という両者を「美」を媒介にして「邂逅」させているのだ。

きみたちはこれから街頭へ進出して試験をうける。ついでには先ずあちこちの公衆電話を片端からかけて見よ。但し本学院に宛ててかけ

るのは断る。

(65)

大川が言っていた「研修」とは、このことであつたのだろう。若干の蛇足だが、公衆電話で一方的に電話をかけおいて「料金は払う必要なし」とは、どういった事態なのだろうか。戦後すぐの公衆電話（自動電話）は、十銭や五銭硬貨の投入音で交換手が入金を確認する仕組みだったが、インフレによる物価高騰で硬貨の流通が不足してしまふ。そこで、硬貨投入口を紙幣に改造した共電式公衆電話機が使用されたが、これでは投入音で支払いを確認することが出来ず、結果電話料金の徴収率は最低に落ち込んだ。もちろん、いわゆる赤電話に代表される委託公衆電話という形で、常に側に人が居る様な方法も採用されたが、裏をかいた学院生たちは、積極的に電話ボックスを利用している。

昭和二七年頃から流通し始めた十円硬貨に対応した青電話機は二八年になつてようやく誕生し、委託公衆電話のいわゆる赤ダルマは二九年になつて新宿に第一号機が設置される。物語の舞台となる二七〜八年は、最も公衆電話料金が踏み倒された時期であつたのだ。

院長は、学院生の目の前で不当に金銭を踏み倒して見せ、それを吃音克服のための気概にすり替えた。さらに、学院生たちが公衆電話で同様の行為を行うことの正当性を主張した。実は、それは、言葉による「闘争」に勝利することで、言葉を僅かばかりの金銭に変換しただけである。その意味で院長の言動は、衣川の見抜いた通り単なる方便である。

だが、この院長の吝嗇ぶりは、大川の勧誘（共産黨員）にも、諸留の策（詐欺）にも陥らなかつたことと無関係ではないだろう。吃音学院の経営の成功と社会的功績により議員選挙に出ようと企む院長は、ブルジョア階級、資本主義体制の中の勝ち組である。また、矯正すべき吃音という「病理」は、言語によって戦つてゆく社会の肯定を前提としている。吃音では、言語社会を渡つてゆくための武器にはならないのだ。

水道橋という都心の街並みの中、皆で同じ言葉を詩の様に「歌い叫ぶ」集団は、昭和三十年前後であつても、相当異様であつたろう。

一行は意気かんで、党派的強みというものが、

「おれたちは吃りだ」と誰かが云うと誰彼となく「吃りだ、吃りだ」

とくりかえし、吃音者の示威運動の感があつた。

(66)

「党派」という比喩は興味深い。戦後、アメリカ陣営の国として資本主義的發展を遂げてゆく中、共産党の活動は所謂撤退戦であつた。だが、それが逆に運動体の結束力を強めていた側面も否定出来ない。「ヘゲモニー」「オルグ」「シユプレッヒコール」といった言葉が学生運動の中で繰り返し叫ばれていたことも故なきことではない。

電話は一人一人でかけるより仕方がないのにボックスの中に三、四人は入つた。電話の相手がこわいのである。ボックスのまわりには十何人が待機している。そのまわりに群衆がたかつている。僕はこれでは悪人になりようがないから、散り散りになるように云つたが、党派的になつてしまつた一行はどうしても動く気配がない。

(67)

全体の中で主体性を失つた個々ではあつても、皆必死で「悪人」になろうとしている。言葉による暴力性を發揮することは、僅かばかりの電話代を踏み倒すことと「等価」である。

サギにかからなかつたのは院長とあと数人で、外交員と会計とが同じとは元来おかしなわけなのだが、よほど諸留は、うまい餌を出したと思う。僕の家族もひっかかった。(中略)僕はもうごめんだと矯正に熱中しだし、院長にも賞められる、賞められると僕は次第にリーダーシップをとり街頭に向向して行つた。

(68)

諸留の逐電は、結果的に衣川をリーダー格に押しやった。逆に見れば、衣川は、結局諸留を「まねて」いるのである。だが、「諸留」になつた衣川を次に待っていたのは大川との対立である。

大川の電話練習の「標的」は、「会社の重役や、役所の課長級以上のもの」といったブルジョア階級の人間たちである。だが、大川の言葉（思想）は、学院内にその政治的オルグを浸透させるには至らない。

一方で、学院内における吃音者同士の「闘争」に、確かに衣川は勝利した。だが、それは閉じられた領域における、自由にならない言語に閉じ込められたものたちの中の「勝利」である。だが衣川には、常界／異界の構造そのものをずらす契機も与えられていたのだ。それこそが、柿本の存在であったのだが、衣川は「外部」に出ることは出来なかった。

物語終盤における「傷痍軍人」との「抗争」、あるいは演説中の警察騒ぎの際に、松波院長が不在であるのは、その内部かつ外部でもあるという特殊な立場をよく象徴している。

院長はそれっきり車を拾い悠然と帰って行った。大川が暫く姿を消し僕らが待っている、フロシキ包みをかかえてきた。場所は大川が指定し、彼の指揮でK暗音学院と書いた提灯に火を点し、プラカードを立て用意を整えた。ところがその大川がびしゃりと横面をひっぱたかれてとんだので、相手を見ると、白衣の傷痍軍人が立っていた。(74)

「異界もの」という構造把握がしばしば誤解を呼ぶように、「異界」とは、常に「常界」と分離した安定した外部にあるわけではなく、まして対等な場であるわけでもない。「常界」の周囲には沢山の「異界」が屹立している。「常界／異界」という二項対立もまた、言語や経済と同様、外部のないシステムであるからだ。我々は、「幻想」という反転した回路でしか、自己も、自己の世界も認識出来ない。

本文引用は、『小島信夫全集4』（講談社・一九七一年五月）。引用末には講談社文藝文庫版の頁を記してある。

注

- (1) 小島信夫「著者から読者へ」『殉教・微笑』講談社文藝文庫、一九九三年一月
- (2) 吉本隆明『共同幻想論』河出書房新社、一九六八年一月
- (3) 岡本真希子「吃音というリズム——小島信夫「吃音学院」論——」『学芸国語国文学』第52号、二〇二〇年三月
- (4) 橋本雄太「日本における吃音観の変遷と伊沢修二——不治の疾患から悪癖へ」『Core Ethics』15巻、二〇一九年三月。ただし、引用中の出典は、奥中康人「国と音楽——伊沢修二がめざした日本近代」(二〇〇八年、春秋社)。
- (5) 先行する解釈として、荒井裕樹「小島信夫著「吃音学院」——(矯正)と(強制)のリハビリテーション——」(『ノーマライゼーション 障害者の福祉』二〇〇六年一月)、大垣さえ「壊れた言語の可能性——小島信夫「吃音学院」を中心に——」(『論樹』二〇一三年一月)、立尾真士「歌うよう」にと「矯正」する——小島信夫「吃音学院」を読む——」(『日本文学』774号、二〇一七年一月)等を参照したが、紙幅の都合上、詳細な検討は、別項に譲ることとする。
- (6) 『わが国クレジットの半世紀』日本クレジット産業協会、一九九二年一月

(ひきた まさあき 東京学芸大学教育学部准教授)